

会くまもと二〇一一を平成二十三年十月二十七日〜二十九日の三日間、熊本市で開催いたしました。一九九七年に第一回リハビリテーション・ケア研究大会が熊本で開催されており、今回十五年ぶりに熊本での開催となりました。この間に介護保険制度が始まり、回復期リハビリの創設など大きな変化がありました。リハ・ケア体制がこの十五年で飛躍的に進んだかという点と必ずしもそうとも言えない現状があります。少子・超高齢社会の進展の中、医療・介護・福祉の環境は厳しく、まだまだ多くの課題が山積みされており、大会テーマを「リハ・ケア再考―すべての人にリハ・マインドを届けよう―」と致しました。リハ・ケア体制を最高のものにしていくためにも一度再考して、大会を通して参加の皆様へリハ・マインドを届けることができればと企画を行いました。

本大会は、特別講演三題、シンポジウム八企画、教育研修講演十一題、ランチョンセミナー八題、特別企画、基調講演、会長講演と様々なテーマでの企画を行い、また、別会場になりましたが市民公開講座「人とロボットの共生―先端技術の医療・福祉への応用と未来展開―」（肥後医育振興会と共催）を開催しました。また、一般演題として七九一題（スライド四八二題、ポスター三〇九題）という、これまでで大幅に超える過去最高のご応募をいただき、天候にも恵まれ参加者も二二二八名とこれまで過去最多のご参加をいただきました。

プログラムの中身について見ますと、まず大会長講演「リハケア・リハマインド、くまもとの原点」で熊本のリハのこ

れまでの流れと熊本方式と呼ばれている地域完結型リハシステムの経緯をお話しし、基調講演として第一回大会長の米満弘之先生に「これまでのリハ・ケアの流れ、リハマインド、その先に見えるもの」としてこれまでの流れ、そしてこれからの展望についてリハマインドをベースに置きながらお話しいただきました。また、特別企画「ゼロからの出発―高次脳機能障害と向き合いながら―」では、高次脳機能障害と向き合い歌手として活動している一ノ瀬健・純二親子にお話しいただき、懇親会では歌を披露してもらいました。

さて、去る三月十一日に東日本大震災が起こり街や社会資源など壊滅的被害を受け、まだまだ復興にはこれから長い時間がかかるものと思われまます。本大会は、東日本大震災後半年を経過したこともあり、二日目にリハ支援関連一〇団体による東日本大震災に対する支援事業も踏まえて、六団体合同シンポジウムとして「東日本大震災と地域リハビリテーション〜リハ支援関連一〇団体の活動を通して〜」を行い、特別企画として被災者でもある東北大学上月正博先生に「東日本大震災後の現地での対応と教訓―「災害リハビリテーション」の必要性―」をお話しいただきました。

また、米満先生の司会で澤村誠志先生、太田仁史先生に「リハ・マインドを全ての人に」というテーマで鼎談をお願いし、ノーマライゼーション〜ソーシャルインクルージョン社会を実現していく重要性をお話しいただき、皆鼓舞されたものと思えます。さらに、特別講演として、慶応大学の里字明元先生に「リハビリテー

ションに活かす先端技術」というテーマでリハへの新しい技術の応用、BMI (Brain machine interface) の進捗状況などを、また、筑波大学の山海嘉之先生に「世界初のサイボーグ型ロボット〜ロボットスーツHAL」というテーマでロボット技術の臨床場面への導入状況についてお話しいただきました。

最終日には、厚生労働省老健局老人保健課長の宇都宮啓氏と石川誠先生に来年に控える診療報酬・介護報酬同時改定の方角性とりハビリテーションについてお話をうかがい、また、日本福祉大学の二本立先生に「医療福祉政策と今後のリハ・ケアの展望」のご講演をいただき、今後の益々のリハ・ケアの重要性をお話しいただき我々にエールを送っていただきました。

各団体のシンポジウムでは、大会テーマのリハ・ケア再考をベースに在宅や地域との連携や地域包括ケア体制構築、質の向上や今後の展望など活発な議論が交わされ、また、熊本のみんなの企画として、セルフケア再構築を目指すリハ看護、住宅や福祉機器による生活環境整備、PT、OT、ST、MSWによるリハ・マインドを届けるための専門性についてと様々な企画を行い全国からの参加者と意見を交換できました。

今回の研究大会は、熊本で培われてきた顔の見える連携を通しての、熊本県内のリハビリテーション病院や施設、セラピスト養成校などの沢山の仲間、ご有志に企画から当日の運営までご協力をいただき、熊本のみならず行なった大会です。多くの関係者のご支援、そして全国からご参加いただいた皆様のご協力で無事に

終了できましたことを心より感謝いたします。
 大会長（熊本リハビリテーション病院 副院長） 山鹿眞紀夫

第二十七回熊本医学・生物科学国際シンポジウム成果報告書

第二十七回熊本医学・生物科学国際シンポジウムが、二〇一一年十一月二十三日（水）無事終了いたしましたので、ご報告申し上げます。

本会は、Plasma protein: Its function and toxicity. このサブタイトルのもと、2nd International Symposium on Transferrin, 7th Japan-China Cooperative Life Science Symposium との合同開催という形で行いました。家族性アミロイドポリニューロパチー (FAP)、および老人性全身性アミロイドーシスの原因蛋白質であり、様々な機能を持つトランスサイレチン (TTR) に関するシンポジウム、Immunoglobulin light chain や血清アミロイドA蛋白質などTTR以外のアミロイド原蛋白質に関するシンポジウム、アルブミン、クラスタリンの機能に関するシンポジウム、さらには autophagy や eukaryotic proteasomes についての講演を中心とした血漿蛋白質の細胞内代謝に関するシンポジウムなどを企画し、学内の先生方を含む国内外（計七ヶ国）の著名な専門家による計十四の講演がなされました（表1参照）。

前日まで開催した第八回国際家族性アミロイドポリニューロパチーシンポジウムの流れも汲み、国内外から合わせて一